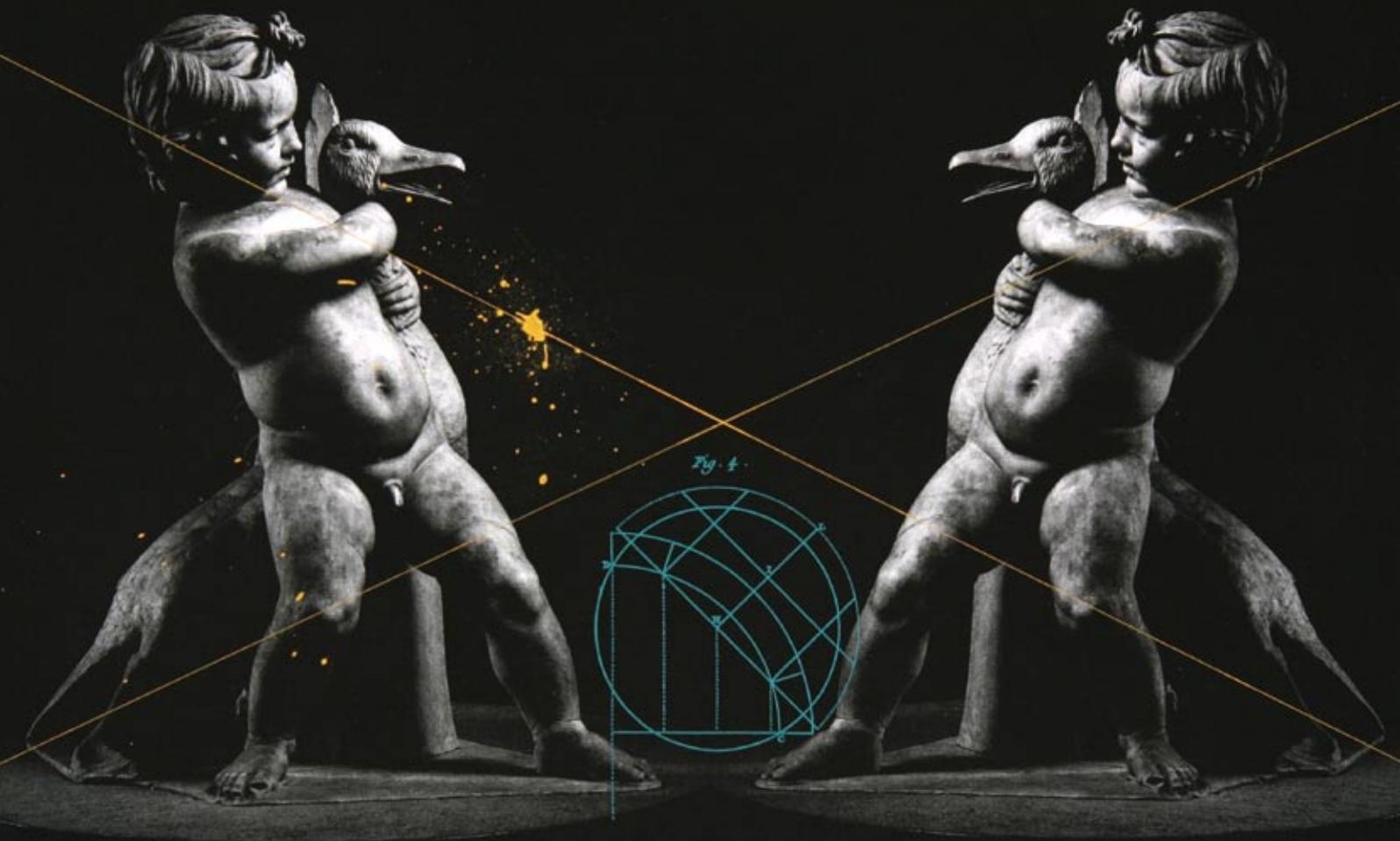


contents

北川健次展	
「Kenji Kitagawa—鏡面のロマネスク」	[2~3]
所蔵品によるテーマ展	[4~5]
〈イベント報告〉	
「森と芸術 —美術と博物が語る森のひみつ—」	[6]
〈イベント報告〉「夏休みキッズミュージアム」	[7]
福井県立美術館 館蔵品紹介	[8]
お知らせ、貸館情報	[8]
福井県立美術館 次回の展覧会案内	[8]

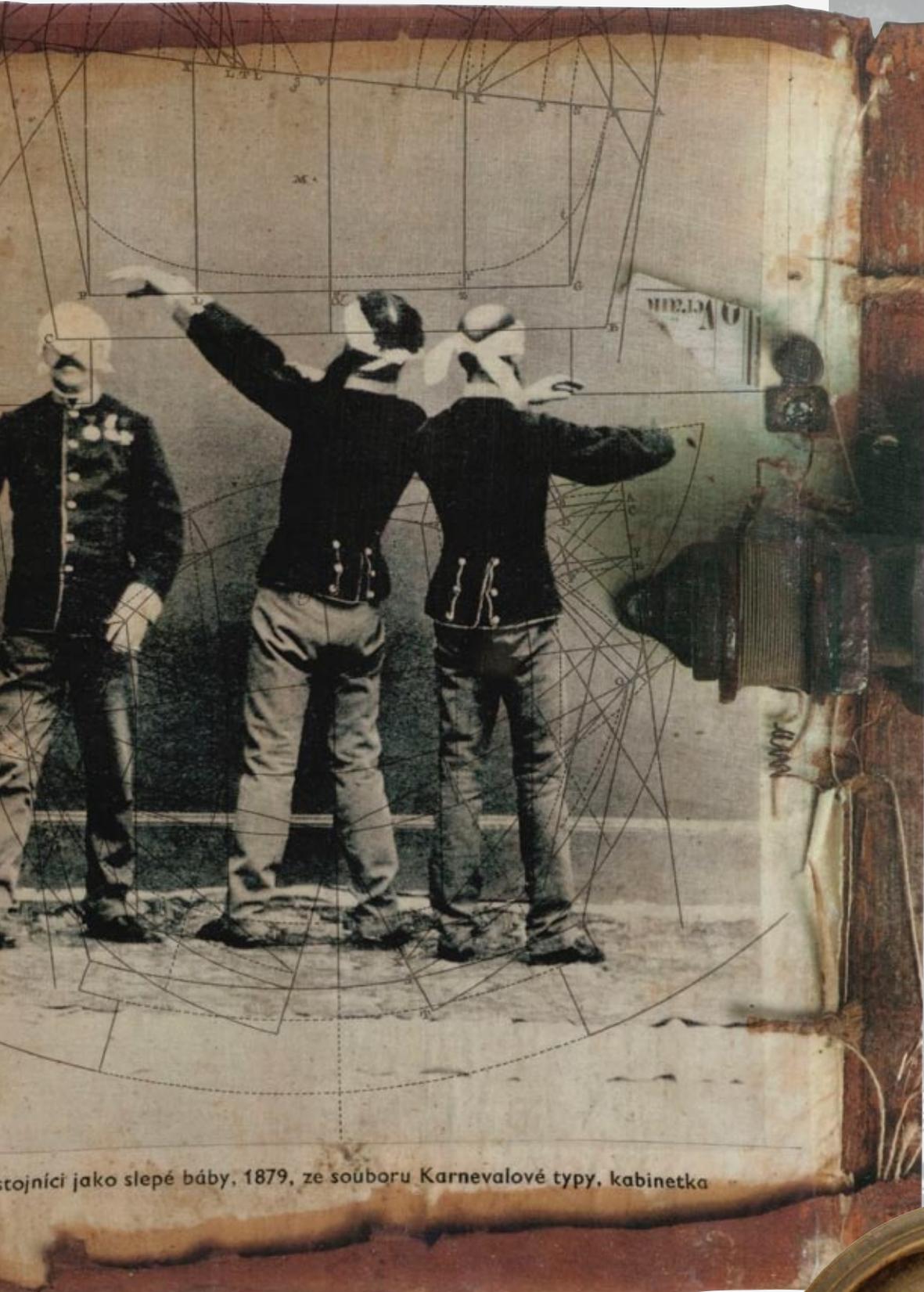
表紙：北川健次 《回廊にて—Boy with a goose》（「北川健次展」より）



# 北川健次展

Kenji Kitagawa

—鏡面のロマネスク



stojníci jako slepé báby, 1879, ze souboru Karnevalové typy, kabinetka

“虚像の中に落ちるためには、  
ただ一枚の鏡の表面をゆがめるだけでよい。”

—ウンベルト・エーコ



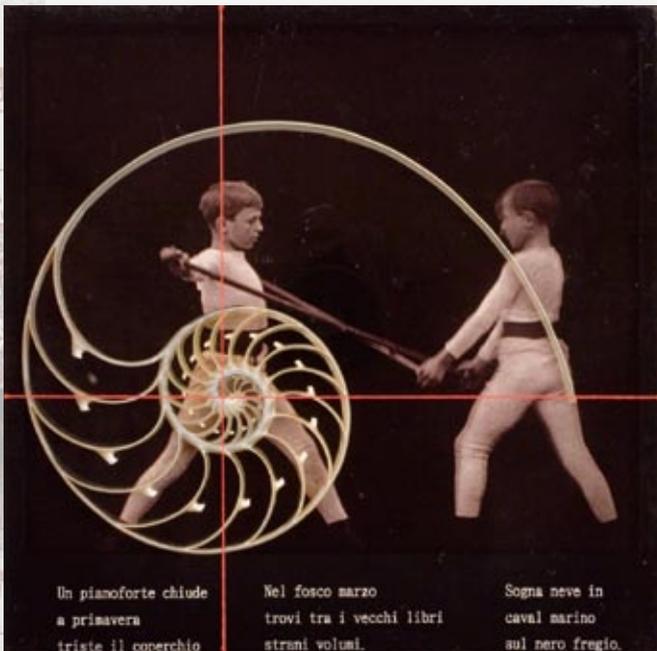


**北**川健次(きたがわ・けんじ)は、1952年福井市生まれの版画家、オブジェ作家です。現代日本美術展ブリタストン美術館賞、東京セントラル美術館版画大賞などを受賞し、文化庁派遣芸術家在外研修員に選抜されて渡欧するなど、本県出身の美術家としては近年最も評価の高い作家の一人です。国立美術館や海外美術館も含め数多くの館で作品が収蔵されています。

近年は新たに写真表現にも取り組み、2010年にはパリにて開催されたランボー展に招待されるなど飛躍の目覚ましい時期をとらえ、公立美術館では

初となる個展を開催しその作品世界を全国に発信します。

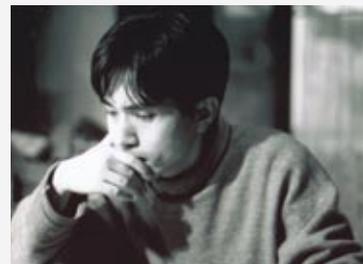
文学・詩作への強い親近性。比類なきメチエへの拘泥。特異なイメージと物質との交感。虚構と引用が生み出す記憶の映像の中に、現代が鋭く映し込まれます。本展では約200点の作品により北川健次の魅力に迫ります。



Un pianoforte chiude  
a primavera  
triste il coperchio.

Nel fosco marzo  
trovi tra i vecchi libri  
strani volumi.

Sogna neve in  
caval marino  
sul nero fregio.



略歴：北川 健次 Kenji Kitagawa

1952年福井県福井市生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。駒井哲郎に銅版画を学び、棟方志功・池田満寿夫の推挽を得て作家活動を開始。日本の銅版画の分野に写真製版の技法を初めて導入する。'75年、現代日本美術展ブリタストン美術館賞受賞。'76年、東京国際版画ビエンナーレ展招待出品・国際大賞候補(東京国立近代美術館)。'81年、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展招待出品。井上有一(書)四谷シモン(人形)坂茂(建築)等と共に『未来のアダム展』に招待出品(企画/高橋睦郎)。'90年、文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。'94年、来日したクリストによりオブジェ作品の賞讃を得るなど、銅版画とオブジェの分野における第一人者的存在。版画、油彩画、オブジェの他に写真、詩、評論も手がける。鋭い詩的感性と卓越した意匠性を駆使した作品は美術の分野において独自の位置を占めている。2008年にランボーを主題とした作品が、ピカソ、クレー、ミロ、ジャコメッティ、ジム・ダイン、メイブルソープらと共に選出され、フランスのアルチュール・ランボーミュージアムにて展覧会が開催される。同年、CLAUDE JEANCOLAS 著による『LE REGARD BLEU D'ARTHUR RIMBAUD』(FVW EDITION 社)に、上記の作家たちと共に掲載される。2010年にパリ市立歴史図書館にて開催された『RIMBAUD MANIA』展に招待出品。2011年に福井県立美術館において個展開催。

【刊行物】

- 『「モナ・リザ」ミステリー』(新潮社)：レオナルド・ダ・ヴィンチ、フェルメール、ダリ、ピカソ、デュシャンについての論考三部作
- 久世光彦『死のある風景』(新潮社)：美術を担当
- 『イマージュの交感—蕪村VS西洋美術』：美術雑誌に連載。単行本として刊行予定。



平成 23 年

11/27 日 ~ 12/25 日

休館日◎12月5日(月)、19日(月)

開館時間◎午前9時~午後5時(入場は午後4時30分まで)

観覧料◎一般800円 大高生500円 中小生300円

※30名以上の団体は2割引 ※学生割引は学生証の提示が必要です

※身体障害者手帳等所持者とその介護者1名は半額(ただし障害者手帳等に介護印のある方のみ)

主催◎福井県立美術館 共催◎福井新聞社

■関連イベント

【記念対談】北川健次の創作の秘密に迫る 12月11日(日) 午後2時~ 当館講堂にて

出演：北川健次(本展出品作家)×芹川貞夫(当館館長) ※聴講無料

【出品作家によるギャラリートーク】

11月27日(日)、12月10日(土) 午後2時~ 当館展示室にて

講師：北川健次 ※観覧券が必要です

【同時開催】所蔵品によるテーマ展「和紙と日本画 —近代日本画の巨匠たち—」

※本展観覧券にてご覧いただけます

11/27(日)～12/25(日) 休館日：12/5(月)、12/19(月)

## 「和紙と日本画 —近代日本画の巨匠たち—

日本画の殆どが絹に描かれていた時代に、和紙の特産地であった福井県今立町で画紙が漉かれるようになります。やがて理想の紙を求める日本画家と工夫を重ねる紙漉職人とのやり取りのなか、数々の日本画紙が誕生しました。現在では日本画の90%以上が和紙に描かれるまでになりましたが、その背後に絵絹から和紙への画期的偉業があったことを、日本画作品や、岩野家所蔵の近代日本画家や学者等の書簡を通してご紹介します。

### 1. 絹と中国の輸入紙の時代……

明治までの日本画は絹に描くのが最上とされ、紙に描く場合でも中国の画紙を好みました。[図1]そのようななか、古来より紙漉きの産地である福井県越前市では明治30年ごろから日本画紙を漉くようになり、雅邦紙など日本画の巨匠の名がつけられた日本画紙が相当数生産されていました。



【参考画像】  
[図1] 狩野芳崖「伏龍羅漢図」  
明治18(1885)年 紙本着色  
中国から輸入された竹紙を使って描かれています  
※今回は展示されません

### 2. 日本画用画紙の誕生……

明治から大正にかけての日本画壇は、江戸時代までの伝統画法や西洋の写実表現などから幅広く手法を学ぶことで、新しい絵画を創造しようとしていました。日本画家たちは西洋の絵具を用いたり、日本画の命とも言える輪郭線を廃するなど、独自の表現を追究し、それぞれに合った画材を求めました。画家たちの画材に対する積極的な姿勢に加え、明治期には清朝末期の混乱のためか中国から上質の紙の入手が困難になったこともあり、国産の質の高い画紙の開発が待たれていました。

越前和紙職人・初代岩野平三郎<sup>いわのへいざぶろう</sup>は大正7、8年頃から学者の牧野信之助の助言で日本画紙の製作に取り組み始めました。富田溪仙や竹内栖鳳、横山大観など日本画革新の最先端で活躍する画家たちに新製の画紙を送り、何度も批評を仰ぎながら漉きあげ、徐々にその質が認められるようになりました。

### 3. 麻紙の復興と岡大紙の完成……

岩野平三郎は歴史学者・内藤湖南より麻を原料にした紙の復元を依頼されます。麻紙は奈良から平安のはじめ頃までよく漉かれていましたが、やがて楮や雁皮を原料とする紙に取って替われ、その技術も長く失われていました。岩野平三郎は試行を重ね、大正15年、麻の他に楮や少量の雁皮を混合することによって強靱さと肌理の細かさの両方を備えた、全く新しい麻紙を誕生させることに成功しました。

同年には、横山大観による求めて早稲田大学壁画のための画紙、史上最大の一枚物の和紙・岡大紙を完成させました。その5.4m四方の紙には横山大観と下村観山の合作『明暗』が描かれ、人々を驚嘆させました。

### 4. 和紙の普及……

横山大観は岩野平三郎の和紙を久邇宮家[図2]、東伏見宮家、九条家など宮家や華族、実業家に紹介するなど、新生日本画用紙の普及に熱心でした。昭和3年、昭和天皇の即位の大礼にあたり悠紀・主基の屏風が新しく調製され、その料紙の調製が岩野平三郎に下命があったのも、それまでの実績と横山大観の推薦があったためと考えられます。この時漉きあげられたのは「白鳳紙」という紙です。

### 5. 絵絹から画紙へ……

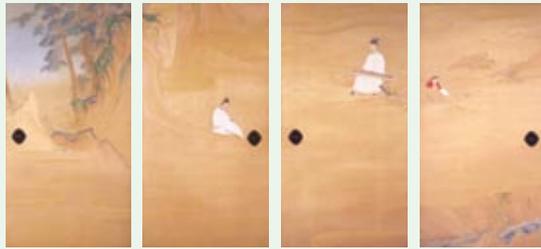
昭和初期は絵絹から和紙への転換期にあります。絵絹では限度があった大型の作品や、絵具を厚く塗り重ねる表現も和紙は可能にし、その普及が進むと同時に日本画の表現の幅も広がりを見せました。現在ではその多くが和紙に描かれるようになった日本画ですが、紙漉き職人と画家たちの挑戦が生んだ結晶であるということ、またそれを生み出すまでに大変な苦勞があったということは常に立ち返りたい原点といえるでしょう。

「然し、畫家と云ふものは一面頗る我儘でもある。表面一應はこんなに易々と誕生したかの如くに見え、やがて歓迎さるゝに至った麻紙製作の裏面には、一方如才なき激励の言葉があると共に、どれ丈け多くの畫家達から不満足と苦情とが持ち込まれたことか、然し、岩野君は、黙々として之に堪へ忍んで、唯一途に満足を與へるまで、黙々として我慢して、少からぬ苦慮を拂つてゐたので、とう／＼これ迄に漉ぎつけることが出来たのである。」

（麻紙の復興と五箇の海場を訪ねた畫家たち）和紙研究「第四号」1-14頁 牧野信之助 昭和14年12月発行

〈 作品紹介 〉

昭和3年<sup>\*</sup>、岩野平三郎は久邇宮家新御殿を飾る天井用紙2250枚、襖用紙96枚(最終的には天井用紙2110枚、襖用紙283枚となる)の注文を受けました。昭和5年に久



〔図2〕 島田墨仙 「知音」  
昭和5 (1930)年 紙本着色 (久邇宮家襖絵)

邇宮家の襖絵として納められたこの墨仙作品〔図2〕は、そのとき岩野の紙、白鳳紙で腕を振った東西の多数の画家たちの作品の一つと考えられます。

※堀十五郎書簡(久邇宮家御殿天井画襖用料紙の注文) 昭和3年2月19日

\* \* \*



〔図3〕 富田溪仙 「越前紙漉」  
大正15 (1926)年頃 絹本着色

富田溪仙〔図3〕は大正14年に越前の紙漉きの現場を見学してスケッチを行い、その風景を何度か日本画に描いています。溪仙は

日本画家たちが日本全国の風俗を分担して描いた大正天皇・皇后銀婚式のための献上絵巻(大正15年)に「越前紙漉」、再興第15回院展(昭和3年)に「紙漉き」(二曲一双屏風 絹本着色 東京国立近代美術館蔵)を発表しており、本作はそれらの作品の前後に制作されたと考えられます。

\* \* \*

竹内栖鳳〔図4〕は奉書風の紙を好み、構想が思いついたときにすぐに筆を下ろすことができるよう、理想の紙の安定的供給を望んでいました。越前和紙職人・初代岩野平三郎に依頼すること数年の後、納得の紙が出来上がり、栖鳳紙と名付けられます。栖鳳紙は楮に少量の竹のパルプを混入し、色白く薄く漉いたものを好みました。



〔図4〕 竹内栖鳳 「満林秋色」  
昭和12 (1937)年 紙本着色

この作品は栖鳳紙ではなく銀潜紙が使われています。大阪の内畑某氏の特許になるもので、岩野平三郎は専属としてこの紙を漉いていました。鳥ノ子成紙の上に銀砂子をふりかけ、その上に薄様の楮紙を漉き合わせたものです。

\* \* \*



〔図5〕 小杉放庵 「寒拾出山図」  
昭和36 (1961)年頃 紙本着色

岩野が小杉放庵〔図5〕のために作った麻紙は渴筆表現に最適であり、画家自ら「麻紙の放庵か放庵の麻紙か」(書簡 昭和16年2月6日)と理想の紙を得た喜びを表現しました。家督を継いだ二代目岩野平三郎も画紙の技を継承し、その確かな技を認めたのは放庵でした。



〔図6〕 前田青邨 「鯉」  
昭和25 (1950)～27 (52)年頃 紙本墨画

前田青邨〔図6〕や小林古径は雁皮を多く用い、滲みの少ない紙を好んだといひます。

\* \* \*

1/3(火)～1/15(日) 休館日：会期中無休

「新春展 一工芸の妙技一」



羽田登喜男  
変織縮緬地友禅訪問着「花野」



楠部彌弐 「色絵白梅茶碗」

1/3(火)～1/29(日) 休館日：1/16(月)

「新収蔵品展②」



「世界図・日本図屏風」(福井県指定文化財)

2/3(金)～2/24(金)

休館日：2/13(月)

「天心ゆかりの画家たち」

近代美術の先駆者岡倉天心は、横浜で福井藩の特産物を扱う貿易商石川屋を営んでいた福井藩士岡倉勲右衛門の次男として生まれました。その関係から当館のコレクションの柱の一つは天心の創設した初期院展を中心とした関係作家の作品となっています。天心生誕150年没後100年という節目の年を2年後に控え、あらためて天心ゆかりの画家たちの珠玉の作品の数々をご覧ください。



菱田春草 「落葉」

# 「森と芸術

# —美術と博物館が語る森のひみつ—

主催…福井県立美術館  
共催…福井新聞社  
2011年7月29日(金)～8月28日(日)

## 《イベント報告》

7月29(金)から8月28日(日)まで、当館では、森に関するさまざまな領域の絵画・写真・工芸・絵本といった美術作品と、恐竜時代の植物・恐竜化石、恐竜の復元骨格や動刻(動く彫刻)、太古の森の想像図等の博物資料を紹介する企画展「森と芸術 —美術と博物館が語る森のひみつ—」を開催しました。

1000枚をこえる森の絵がならんだ「ふくいの子供たちが描く1000枚のふくいの森」コーナーの設置や、「森と芸術のワークシート」の配布等もあり、県内外からたくさんの方々にご来場いただきました。

この展覧会にあわせて開催した関連イベントは次のとおりです。

### ◎巖谷國士氏(監修者、明治学院大学名誉教授、美術批評家、仏文学者)によるギャラリートーク

[場所] 当館講堂、展示室 [日時] 7月29日(金) 14:00～

\* \* \* \*

講堂で展覧会の概説をお話しいただいた後、展示会場で実際の作品を前に巖谷氏による解説が行われ、デューラーの描く楽園の森、クロード・ロランにはじまる各時代の風景画、ガレの花器にみられる図像化された森、セリュジエやドニの描く伝説の森、グリムやアンデルセンの挿絵、マグリットやデルヴォーによるシュルレアリスムの森の幻想と神秘、民俗学的な見地から森の本性に迫った岡本太郎の森、アニメーション『もののけ姫』の背景にひろがる男鹿和雄の描いた日本の森等について触れていただきました。これらは、私たちのうちにひそむ「森の記憶」をよみがえらそうとするものばかりであり、福井県出土の化石等の博物標本や、太古の森の想像図も、現代人に受けつがれているはらかな「森の記憶」を探るものだと話される氏の言葉に、来場者は熱心に聞き入っていました。

「ふくいの子供たちが描く1000枚のふくいの森」コーナーの、1000枚をこえる森の絵に関しても、すばらしいものがたくさんある、生きた森が描かれている、と絶賛されていました。

### ◎講演会「森と芸術 —失われた楽園を求めて—

[講師] 巖谷國士 [場所] 当館講堂 [日時] 7月30日(土) 14:00～

\* \* \* \*

巖谷氏による講演会「森と芸術 —失われた楽園を求めて—」は、展覧会に出品された主要な作品の画像をみながら、各々の作品についての詳細でわかりやすい解説を中心に行われました。

出品作品についてだけではなく、宇宙や地球の成り立ち、恐竜の歴史から人類の歴史へと話が及び、あらゆる生物が共生していた場所が「森」であり、福井の展示では、美術と博物館の視点から「森」そのものの記憶が照射されている。作品をつくった人々は、自分の中の森の記憶を探りながら描いたのではないかと等々、斬新な観点で「森」を語っていただき、とても興味深い講演会となりました。

終了後も氏に質問や著作物にサインを求める来場者が後をたちませんでした。

### ◎学芸員によるギャラリートーク

[場所] 当館展示室

[日時] 8月14日(日) 14:00～、8月21日(日) 14:00～

[参加者] 約70名



巖谷國士氏によるギャラリートーク



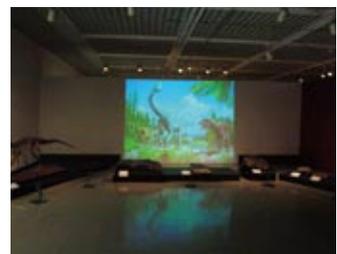
巖谷國士氏による講演会  
「森と芸術 —失われた楽園を求めて—」



学芸員によるギャラリートーク



フクイサウルス動刻



展示風景



「ふくいの子供たちが描く1000枚のふくいの森」コーナー

「ふくいキッズミュージアム」(所管：県教育委員会文化課)は子ども向けの鑑賞と創作プログラムです。昨年2回のトライアルを経て今年の夏に本格実施され、福井県立美術館ボランティアの会の協力のもと、4講座13回で約500名の参加がありました。

福井県立美術館  
ボランティアの会

「ふくいキッズミュージアム」への協力事業を終えて



ペーパークラフト講座



ログハウス



絵の宿題応援



◆ ペーパークラフト講座 ◆

おもてなしセットをつくろう/  
みんなでログハウスをつくろう/いすをつくろう

今年とはとても暑い夏でした。そのなかで子どもさんと一緒にダンボールのログハウスやイスを作りました。大勢いるなかには、きちんと言うことを聞く子や、自分のペースで進める子など、色々でした。そのようななか、対応した佐々木学芸員、講師の内藤秀信氏、引率の先生方など大変だったことでしょう。

しかし出来上がったログハウスに目を輝かせ、その中に歓声を上げて入っていったり、椅子に座って満げに作品を眺めたりしている子どもたちを見ていると、このような企画があつてよかったと思いました。

今回キッズミュージアムに参加した子どもたちが、大人になって美術館に来た時、ログハウスや椅子を作ったことを思い出してくれればいいな…と思いました。

◆ 夏休み 絵の宿題応援 ◆

8月4日、「夏休み宿題応援」では、子どもたちは日本画家の堀出周子先生のご指導の元、集中して取り組んでいました。先生から絵具の混色の基礎や、バックの森の表現の仕方など助言された子どもたちは、充実した絵を次々と完成させていました。

◆ 針穴写真教室 ◆

当日は日差しが強くとっても暑い日でしたが、写真を撮るにはすこぶる好条件でした。朝9時30分過ぎに緊張しながら工作室に入ると、とても楽しそうな空気が教室中にあふれていました。子どもたちは皆一生懸命

で、説明もしっかり聞き、分からない子には分かる子が教えていました。皆うまく写せたかと心配しましたが、とても上手で感心しました。また、上下反対になって画像が写る様子を見ると、こんな風に写るのかとワクワクして私も参加したい!!という気持ちでいっぱいになりました。

しかしこんなに簡単にカメラが作れ、写せるとはビックリでした。私は今年6月からボランティアに入会したので、美術館にこのような企画があることを初めて知りました。もっともっとたくさん子どもたちが参加できるチャンスを作りたいです。

◆ 針金細工で恐竜をつくろう ◆

うわおおお?! 驚きの声が針金細工教室の始まりでした。講師の中島郁子先生がサンプルで作られたティラノザウルスをお披露目したときの様子です。

中島先生の作品を見た参加された親子は、完成したときの期待感と若干の不安をいだいて工作が始まりました。作業が進み、さまざまな種類の針金を使って徐々に恐竜のかたちが出来ていくと子ども達はさらに真剣さを増していきました。また、子ども以上に針金細工の世界にのめりこんでしまった親御さんとの共同作業は、ほほえましく感じられました。

教室も終える時間が近づき、作品が完成して喜びの表情の親子、完成した作品にさらに手を加えようとする親子。みなさんに最後には、にこやかな表情となっていました。

今回の針金細工教室は、作品づくりの喜び楽しさを体感したとともに親子の絆を深める機会になったようです。



針穴写真教室



針金細工で恐竜をつくろう



展覧会鑑賞

狩野芳崖 『柳下放牛図』

1884(明治17)年 58.7×112.8cm



近代日本画黎明期の傑作「悲母親音」(重要文化財)で知られる狩野芳崖(1828-1888)は、人生の晩年期にお雇い外国人教師フェノロサに見出されるまでは赤貧洗うがごとしであった。

この作品は、フェノロサから月給を貰うようになり、やっと画業に専念できるようになった1884(明治17)年に描かれたものである。芳崖はこの絵に込めた自らの画論を、フェノロサに次のように説明している。「画中の牛はこの絵の中心であり、万象

を統一する存在となっている。遠景の水の流れ、細い小道、柳の枝、雲などすべての要素が牛に向かって集中し、山の形を牛の形状に似せるといった工夫をしている。」

伝統的な画法と東洋の精神を大切にす一方、空間の広がりや西洋画法を取り入れている。このように様々な造形的試みを施した本作からは、西洋文明の流入と社会変革に翻弄されながらも、先駆者として近代の日本画を模索した芳崖の苦闘の跡を読み取ることができる。

安田鞞彦『方丈閑日』

1937(昭和12)年 81.0×115.0cm



本作に描かれている人物は、室町時代前期の大徳寺の禅僧一休宗純と足利家の蝸川新左衛門である。一休は晩年、京都の近郊に別庵酬恩庵を構え、大徳寺と往復していたといわれている。この絵では、その方丈(住職の居室)で蝸川新左衛門と閑談している様子が描かれている。庭の枯山水の石組みは江戸時代初期に造られた

方丈庭園を、一休の風貌については東京国立博物館所蔵の肖像を参考にしていると思われる。色彩が極度に制限され抑えられているのも、この清閑な情景を表現するのにふさわしい。

本作は鞞彦が力を入れていた七絃会に出品されたもので、いくつかの重要な画集にも掲載された貴重な作品といえる。

上記2作品は11月27日～12月25日開催の「和紙と日本画」で展示予定

お知らせ

◎12月～2月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。

12月5日(月)、19日(月)、26日(月)～平成24年1月2日(月)、16日(月)、30日(月)、2月13日(月)、27日(月)～29日(水)

貸館情報 [11/30～2/26]

- |                               |                                    |
|-------------------------------|------------------------------------|
| 11/30～12/4 ● 第33回琢の会洋画展       | 1/24～1/29 ● 稲村雲洞米寿記念展              |
| 12/1～12/4 ● 日本画三人展            | 1/27～1/29 ● 書勢会展一競書展・会員展           |
| 12/7～12/11 ● 第6回墨仙社水墨画展       | 2/1～2/5 ● 福井県庁退職者連盟会員第2回作品展        |
| 12/8～12/11 ● 新彫会彫刻展           | 2/3～2/5 ● 第32回日本墨書会展               |
| 12/15～12/18 ● 第45回彩美会日本画展     | 2/10～2/12 ● 第44回洗心小品展              |
| 12/22～12/25 ● 全国大学・高専卒業設計展示会  | 2/10～2/12 ● 福井工業大学建設工学科建築学専攻卒業研究展  |
| 12/23～12/25 ● サークルM パッチワーク作品展 | 2/11～2/12 ● 科学技術高校テキスタイルデザイン科卒業制作展 |
| 1/5～1/8 ● 千葉半庵の書              | 2/14～2/19 ● 浜野龍峰書展                 |
| 1/5～1/9 ● 第30回映彩会水彩画展         | 2/17～2/19 ● 福井高校デザインコース卒業制作展       |
| 1/10～1/15 ● 第24回美浜美術展         | 2/22～2/26 ● グループ樹・写画瑠・悠美「絵画作品展」    |
| 1/11～1/15 ● 第2回新ACB(あしび)展     | 2/22～2/26 ● 福井大学教育地域科学部            |
| 1/18～2/6 ● 壺 越前北島重光展          | 美術教育サブコース卒業・修了制作展                  |
| 1/20～1/22 ● 第59回福井奎星展一会展・公募展  |                                    |

福井県立美術館  
次回の企画展案内

岡島辰五郎没後50周年記念  
岡島コレクション展  
2012年3月2日(金)～3月25日(日)

「岡島コレクション」は、福井県大野市出身の岡島辰五郎おがしまつとろ氏(1880～1962年)が、アメリカ・ニューヨークで美術商を営む間に収集した、日本を中心とする東洋の金工品を主とする古美術のコレクションです。東京美術学校(現東京芸術大学)で金工を学んだ氏の確かな見識と審美眼に基づいて収集された作品は、刀装具、喫煙具から金銅仏、漆器等と多岐にわたり、その数は673点にもなります。

これらコレクションは昭和33年に、郷里である福井県に美術館建設資金とともに寄贈され、その存在は美術館とともに、長らく県民に親しまれてきました。

本展は来年が岡島氏の没後50年にあたるのを機に開催するもので、豊富なコレクションの中から優品を厳選して展示し、その魅力をご紹介します。



五三桐紋衛府太刀(部分)